

独身を生きる

松田 悦子

独身者の存在は、教会の中でも置き去りにされるような気がします。若い青年たちには、結婚に向けての動機付けや学びなども積極的にされますが、ある程度の年齢になると、周囲も声をかけづらくなるのでしょう。だからと言って、高齢(?)の独身者向けの何かがあるわけでもありません。そういう方々の必要にも心を向ける必要があると思います。

私自身の歩みを振り返ると、結婚への希望を抱いて熱心に祈った時期もありました。ただ私の性格から、積極的に相手を探したり、だれかに相談したりすることはありませんでした。優等生的に言えば、「神様が出会わせてくれるのを待とう」という思いでした。しかし、結果として出会いもなく、今まできています。

独身として感じるマイナス面は、まず既婚者に対する嫉妬や羨望、劣等感です。「結婚して神様の愛がよくわかるようになった」という証しを聞いた時に、「結婚していない私には神様の愛はよくわからないというのか」と曲がった受け止め方をし、そんな自分に嫌悪を感じます。また、その日あった出来事、感じたことを気軽に話す相手がいないという寂しさを感じることがあります。

逆に、独身でよかったと思ったこともあります。それは40歳のときに韓国に留学したことです。当時、一人暮らしで仕事をしていた私は、自分一人の生活だけを考えればよかったので、すぐに決断することができました。この留学は神学校に通うためでしたから、これがなければ、今こうしてお話ししている私はいなかったと思います。また、今の教会に招聘されたときも、一人であるがゆえに応じられたという部分もあります。

もう一つ、先ほどのマイナス面の裏返しで、すぐに話せる人がいないということは、その分、神様に向かうようになるということです。特に、人に頼る傾向が強かった私は、この点の訓練をずいぶん受けました。信仰生活を送りながらも、神様よりも人を頼ってばかりいたために、人間関係が壊れてしまったこともあります。その相手が配偶者でなかったことは本当に感謝です。

「母の胎から独身者として生まれた者がいます。また、人から独身者にさせられた人たちもいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった人たちもいます。それを受け入れることができる人は、受け入れなさい。」(マタイ 19:12) 独身者であることを受け入れるということは、結婚に対する希望も願望もなくなるということですから、そうならば楽なのに、と何度も思いました。青年たちの結婚の知らせを聞いたり、夫婦が仲睦まじく手をつないだり会話したりする姿を目の当たりにしたりしたときの、複雑な感情から解放されたいと願いました。

一方、「私が願うのは、すべての人が私のように独身で生きることです。しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります。」(第一コリント 7:7) というみことばがあるように、今、私が独身であることには意味があると考えます。今独身でいる理由は人によって違いますが、大切なのは、その理由や経緯ではなく、今、私が独身であるという事実であり、そのことにどういう意味を見出すか、ということです。そこには神様の計画が、召しが、使命があります。

ですから、「なぜ独身なのか」「なぜ結婚できないのか」と思い悩むよりも、今独身いることには意味があると信じ(今はわからなくても)、ただ神様を信頼して歩んでいくしかありません。神様が私に与えられた賜物を生かして、今置かれている場所で私なりの生き方をしていくことが御心にかなうことなのだと思えます。